

二〇二五年五月一日

会報



■支部大会のご案内

二〇二五年度 春季大会

日程…二〇二五年六月七日（土）

場所…龍谷大学大宮キャンパス

※春季大会はオンラインでの中継も予定しております。詳細につきましては、同封の別紙ならびに、関西支部公式ブログをご確認ください。



【プログラム】

■開会の辞

龍谷大学 天野勝重

■自由発表

森鷗外「心中」論——近代的視点の枠組みに内在する〈不思議〉——

アラジャクルオール・ブルジュ

長田幹彦と『神戸新聞』——『妖魔の笛』連載をめぐる——

浅井航洋

坂口安吾「餅のタタリ」論——『農民文学論争』あるいはその陥穽——

田中聡一

■特集企画

三島由紀夫のパフォーマンス

（趣旨説明・司会） 佐々木幸喜、東口昌央
（講演） 佐藤秀明

（発表者） 斎藤理生、木谷真紀子

■閉会の辞

関西支部支部長 関肇

■総会

※懇親会（飲食有）を開催の予定です。

■自由発表

「自由発表要旨」

森鷗外「心中」論——近代的視点の枠組みに内在する〈不思議〉——

アラジャクルオール・ブルジュ

森鷗外の「心中」『中央公論』一九一一年八月一日の怪談風の語りは同時代から現在に至るまで着目されてきたが、その特性の基調にある〈不思議〉を巡る同時代言説が「心中」においてどのように反映されているかについては述べられてこなかった。

明治初期以降、合理主義的・科学的視点の登場とともに前近代的〈不思議〉は無効な認識とされ迷信として排斥される一方で、天皇を中心とする国家神道がナショナルな信仰システムとして新たに構築されていった。しかし、一柳廣孝が指摘しているように、明治三〇年代半ばから〈怪異否定の枠組み〉が揺らぎはじめ、それまで近代科学的な理解の浸透により一蹴されてきたオカルトや地域の習俗が再び興隆することとなり、そのような〈不思議〉の曖昧さを担保する社会の受容は

「心中」において、物語内に〈お金〉の語りと〈僕〉の再話の両立において表れている。本発表では明治時代の〈不思議〉・オカルトをめぐる研究を元に、〈不思議〉の排斥から再び受容へと展開していくその同時代言説の変容を考察する。

次に、本文分析を通して「心中」における

〈不思議〉に着目する。〈僕〉の近代的、合理的視点により出来事を包摂するとともに、お金の怪談的話法を代筆する形を採るこの物語は、物語世界外の〈近代的〉な視点が、物語世界内の非合理的な身体感覚の領域をより前景化させ、〈近代〉の内で温存された〈前近代的〉側面を、物語の主体である女たちの言外の感覚とともに浮かび上がらせている。

「心中」の〈前近代的〉な〈不思議〉と、近代的視点の枠組みに内在する〈不思議〉の両方を対象化することにより前近代と近代という枠組みがいかに相対化されているか読解を試みる。

長田幹彦と『神戸新聞』——『妖魔の笛』連載をめぐる——

浅井航洋

新聞小説研究においては、東京や大阪の大手新聞がクローズアップされがちで、地方新聞に連載された長編小説についての研究は少なく、連載に至る経緯などの内情は不明な部分が多い。地方新聞が東京の文壇作家に小説を依頼することにおいて、どのような難しさがあったのか。本発表では『神戸新聞』に連載された長田幹彦『妖魔の笛』（大正一三・一・一〇六・二三）に生じた新聞社と作家との軋轢から考えてみたい。

大正期『神戸新聞』の連載小説には旧硯友社系の作家や社内の記者による作品が多く、

中央文壇の作家による執筆はほとんど見られない。新聞小説家として東京の諸新聞で活躍していた長田幹彦を起用することは、『神戸新聞』にとって新しい試みであり、それは『大阪毎日新聞』や『大阪朝日新聞』といった関西の大手新聞に対抗するための戦略でもあった。

このように期待された『妖魔の笛』だったが、休載をきっかけに幹彦と『神戸新聞』との間に軋轢が生じ、完結直前に連載が打ち切られてしまう。さらに『神戸新聞』は打ち切りに至った事情を暴露し、幹彦を非難する記事を四日にわたって掲載するという異例の対応をとる。

本発表では大正期『神戸新聞』の状況や連載小説の傾向を整理し、幹彦を起用したそのメディア戦略を考察するとともに、『妖魔の笛』が打ち切りに至る原因となった新聞社と作家との軋轢を連載状況や新聞読者の反応から跡づけていく。そうした作業を通じて、大正期『神戸新聞』と東京の作家との距離を明らかにしたい。

坂口安吾「餅のタタリ」論——〈農民文学論争〉との関わりから—— 田中聡一

坂口安吾「餅のタタリ」は、『講談倶楽部』（五四・一）に「田園諷刺小説」として発表された。上州の一農村を舞台とする本作は、正月の餅をめぐる些細な騒動が農民同士の

軋轢を媒介して富農の没落へまで展開する様子を戯画的に描き出す。本作について先行論は、農村に材を採ったファルスとするか、農村の保守性への批判を読み取るかであった。ただし、かかる農村批判は本作以外の複数の安吾作品にも見える。それが本作でなされていることこそが意味づけられねばなるまい。

本作の評価に際しては、杉浦明平「農民文学は育つか」（『日本読書新聞』五三・一二・一四）で一応の決着を見た〈農民文学論争〉が補助線となる。大原祐治「小市民の幸福」と公共性」（二〇一二・七）が指摘する通り、当時の安吾による農民文学批判は、〈農民文学論争〉の口火を切った武田泰淳「日本を知らない日本人」（『朝日新聞』五三・七・五）のそれと軌を一にしていた。大原は、安吾「中庸」（『群像』五三・六）にその農民文学批判が表出すると述べるが、五三年下半期を通じて展開された〈論争〉と安吾との関係性は考察の余地を残す。

以上の見立てのもと、本発表ではまず〈農民文学論争〉で展開された議論を整理する。特に、それが戦後農民文学のありようをめぐるものであったことを示し、同時にその問題点も析出する。その後、本作の農村批判を（農民文学論争）と関連づけて検討し、本作の評価を試みる。

■特集 三島由紀夫のパフォーマンス 「企画趣旨」

二〇二五年、三島由紀夫の生誕一〇〇年を迎える。これを好機として、本年度の春季大会では「三島由紀夫のパフォーマンス」と題する特集を組み、あらためて三島由紀夫の文学について考えたい。

かつて秋山駿は、三島由紀夫は「死後に成長する作家だ」と述べたが、自決によって四五年の人生に幕を下ろした三島由紀夫の文学は、今日においてもなお読み継がれており、彼の文学を原作とする舞台や映画も絶えず生産されている。メディアも賑わい、近年もE T V特集やNHKスペシャルなどで取り上げられ、映画「三島由紀夫VS東大全共闘」も話題になった。これらに先立って『三島由紀夫研究』も創刊され、解釈の欲望がますます喚起されているように見える。この理由として、三島の文学の魅力もさることながら、メディアへの露出も多かった作者自身の彩りと起伏にとんだ人生も無視できない。これを作者による〈演技〉的なパフォーマンスとして見た場合、それはいったい誰のための、何のためのパフォーマンスだったのだろうか。それは成功したのだろうか。何に直面することで（何を排除することで）、この過剰にパフォーマンスな主体が確立したのだろうか。

実際、三島由紀夫は〈演技〉に強い関心を

持ち、能や歌舞伎、映画や舞台に深く関わり、戯曲を発表し、映像作品に出演したが、この〈劇化〉は自身の肉体にも及び、ボディビルで鍛えて、日の丸の鉢巻をして日本刀を構えたボートレイトを作成するにいたる。さらには自衛隊に体験入隊し、「楯の会」を結成し、戦後民主主義を欺瞞だと批判して天皇を擁護し、全共闘の学生と対峙し、やがて市ヶ谷駐屯地での演説と自決に行き着く。

磯田光一は「『有効性』の観念に還元できない人間の『精神』への、そして現実を超えた『秩序』への、逆説にみちた高らかな賛歌」（『殉教の美学』）を導き出し、三島が実践した戦後社会への反措定を評価した。一方で、金芝河は「三島由紀夫の死に反対する」で、個人の死を悼むとしても、朝鮮半島を支配していた日本を復古する風潮が三島の死を絡め取ることを批判した。政治的なイデオロギーやジェンダーや分断の視点を次々に呼び込む三島由紀夫のパフォーマンスへの評価は二極化しがちだが、体制・大勢に迎合する戦後社会を批判し、学生運動にも一定の理解を示し、必ずしも全面的に日本を肯定したのではなかった三島由紀夫の人（パフォーマンス）と文学について、容易に正否を決することはできない。だからこそ、現在の地点から、具体的な作品の繙読によって三島由紀夫のパフォーマンスを考えていく必要がある。

本特集では、まず近畿大学名誉教授の佐藤

秀明氏に「没落華族の表象——『斜陽』と三島由紀夫——」と題するご講演をいただき。次いで、大阪大学の斎藤理生氏に「談話と偽者——昭和二〇年代の新聞記事と三島由紀夫——」と題するご発表をいただき、東京科学大学の木谷真紀子氏に「三島由紀夫『邯鄲』論——『近代能楽集』の誕生と雑誌『人間——』と題するご発表をいただく。会場からの質疑を受けて、三島由紀夫の可能性を現代に問う活発な議論を、登壇者の諸氏を中心として行いたい。

「講演・発表要旨」

没落華族の表象

——『斜陽』と三島由紀夫——

佐藤 秀明

没落華族を描いて、圧倒的な熱量で世に迎えられた太宰治の『斜陽』は、しかし、高見順、豊島与志雄、志賀直哉、三島由紀夫からは華族が描けていないという批判を蒙ることになる。とりわけ三島由紀夫は、随筆「没落する華族たち」や短編小説「ラウドスピーカー」「蝶々」「頭文字」「宝石売買」ほかで、華族の若者をリアルに描き、それを示すことで、太宰を批判したのである。

しかし『斜陽』は、本当に華族が描けていない小説だったのだろうか。作品の細部を拾い集めて再構築すると、華族家の骨格はかなり書けていると思うのだ。問題になったかず

子の敬語には、確におかしなところがある。その一つひとつを点検してみると、敬語の誤用や過剰使用から、高慢な面を後退させたかず子の庶民的性が前面に出て来る。

その上で『斜陽』を読み解くと、作品では明示されないかず子の企みが見えてくる。そしてそれが、太宰の『斜陽』における戦略だったことが窺えるのである。高らかに、また執拗に『斜陽』批判をした新人・三島の太宰へのパフォーマンスは、とんだ空振りを喫していたのである。

しかし三島は、没落華族から二十年後のエンターテインメント小説『夜会服』で、没落せずに生き延びた元華族を描き、『斜陽』に一矢を報いることになる。

講演では、『斜陽』の多くの読者が支持した「没落」が、『夜会服』によって甘い認識でしかなかったことを明らかにし、特権階級の生態にまで話を及ぼしたいと考えている。

談話と偽者——昭和二〇年代の新聞記事と三島由紀夫——

斎藤 理生

敗戦から間もない時期に発行された地方新聞や全国紙の地方版をめくっていると、比較的早い段階から、三島由紀夫の作品や記事に遭遇することがある。ごく短い小説、随筆、アンケート、談話などである。それらの中には、稀にはあるが、単行本に収められず、決定版全集にも収録されず、掲載後に忘れら

れ、近年まで知られていなかったものが含まれる。今回の発表では、そのような調査の過程で発掘したものを中心に、昭和二〇年代（特に二二年から二七年ごろまで）の新聞記事に表出された三島由紀夫について考えたい。その際、特に談話（インタビュー）に着目する。もちろん、談話において三島が語ったとされている言葉は、新聞社による意識的な、あるいは無意識的な編集や改変を経ている。その点では、書かれた作品と同じ水準で受けとるべきではない。しかし、作家が常に受動的な立場にあったわけでもあるまい。談話は、メディアと作家それぞれの意図や期待が交錯し、イメージがせめぎ合う場として捉えられないだろうか。同時に、昭和二三年の新興地方紙に掲載された、三島の偽者が現れたという記事も取りあげる。偽者それ自体は、作家本人にも周囲にも、はた迷惑な存在に違いない。しかし後世の研究者は、その姿から、同時代の作家像を知る手がかりを得られるかもしれない。三島をめぐる考察を通じて、他の文学者にも関係する問題を提起できればと考えている。

三島由紀夫『邯鄲』論——『近代能楽集』の誕生と雑誌『人間』——

木谷 真紀子

三島由紀夫『邯鄲』は、昭和二五年一〇月に「人間」に発表された。雑誌「人間」は、川端康成が中心となり、戦後間もない昭和二

〇年一〇月に創刊された。三島は川端の推挽で昭和二二年六月に『煙草』を発表して以降、作品を掲載する機会を多く与えられた。実は三島の最初の戯曲『火宅』も、同性愛の小説『春子』も、三島戯曲の中でも最も評価の高い作品となる『近代能楽集』の第一作となる『邯鄲』も、この「人間」が発表媒体である。『邯鄲』は、その名が示すように謡曲『邯鄲』に拠っており、謡曲『邯鄲』は唐の小説『枕中記』に材を得ている。三島作『邯鄲』は、主人公である一八歳の次郎が、かつて次郎の家に仕えていた菊を訪ねるところに始まる。次郎の目的は、町で出逢ったサンドイッチマンから聞いた、菊の持つ不思議な枕で休むことにあった。しかし、夢の中で、夢から覚めた次郎は、これまでの枕の使用者とは異なる変化をする。

本発表では、「人間」という雑誌と三島の関係に着目しつつ、『邯鄲』の主人公の次郎の人物像を分析し、三島が「青年」をどのように描いたか、また「人間」に「僕の人生はもう終つちやつたんだ」とする次郎を描いた意味を考察する。そのうえで三島由紀夫の初期のメディア戦略を通し、今回の企画のテーマである「三島由紀夫のパフォーマンス」を一側面から明らかにすることを目的とする。

■書評

矢本浩司 著

『文学と内なる権力 日本近代文学の諸相』

田中聡一

本書は、その表題の通り、明治から現代までにおける日本近現代文学の諸作品について、「人間関係」から生成される「権力」の観点から論じたものである。

第一部「漱石文学の応答責任」では、「ころ」「坊ちゃん」「蛇」が主に扱われる。第二部「文学と権力」では、森鷗外「高瀬舟」、伊藤左千夫「野菊の墓」、横光利一「マルクスの審判」、菊池寛「入れ札」、村上春樹「恋するザムザ」が扱われる。第三部「戦後の風景」では、中野重治「萩のもんかきや」、遠藤周作「海と毒薬」、坂口安吾「桜の森の満開の下」が扱われる。これら三部では、右に挙げた諸作品の作品論が展開される。テキストを書く主体（作家あるいは語り手）に注目し、ラカンの「欲望の転移」理論を活用した読解が主に採用される。中野「萩のもんかきや」を除いた全てのテキストから、国家権力とそれに抗おうとする個人の関係性が批判的に読み取られていく。中野はむしろ国家権力への批判を抑制したことが批判される。

第四部「表現の横断」からは趣向が変わる。本部には「表現の自由をめぐる」「年上の女が先に死ぬ物語」「近代の恐怖表象」の三章が収められる。ここでは、部題のとおり

種々の文学・漫画・映画作品に見える表現が横断的に検討される。作品論ではなく表現の観点から、近現代の文芸が共通して抱え込む表現の自由・ジェンダー・近代的個人の問題が問われている。

全五章で構成される第V部「中本たか子の時代」では、「それほど多く論じられてはいない」「長い作家生活における文学的な変遷とその意味」を、生い立ちから敗戦直後まで「事実と証言に基づいてたど」る。新出書簡も二通紹介される。上京以来、新感覺派から文壇デビューし、その後左傾、逮捕・拷問・入院を経て戦中を過ごし、夫・蔵原惟人との敗戦直後の生活までが丹念にたどられる。中本の活動の変遷を追いつつ、「どんな時も労働者の側にあるとする」姿勢の一貫性を見出す。

右の通り全五部二〇章に及ぶ本書は著者の力量と視野の広さを示すように多様な作品を扱う。しかしそれ故か、「権力」を生成するとされる「人間関係」が個々の章で小説テキストのそれなのか、作家のそれなのか、といった揺れも見える。ただ、それは同時に読みの可能性なのかもしれない。

いずれにせよ本書は、文学における「権力」を考察する上で今後も参照される一冊となるだろう。

（二〇二四年一〇月一一日 翰林書房 三八四頁 四二〇〇円＋税）



荒井真理亜・副田賢二・富永真樹・中村建編 『戦前期週刊誌の文学と視覚表象——『サンデー毎日』の表現戦略』

武久真士

本書は『サンデー毎日』を中心に、戦前の週刊誌が言説空間においてどのような役割を担い、どのように機能したかを研究したものである。芥川龍之介や薄田泣菫、小村雪岱、中上健次などをめぐる一三本の論文に加え、コラム、インタビュー、索引、記事データなどを備える本書は、六〇〇頁を超えるボリュームに含まれている情報量そのものがなにより魅力だと言えるだろう。また、二〇二五年一月現在「準備中」となっているが、本書にも一部収録されている視覚表象データベースは文学通信のホームページで公開され、自由度の高い形で利用を可能にする予定だという。本書は週刊誌をめぐる研究成果のひとつと、同時にこれからの研究の基盤となるものが、同時にこれからの研究の基盤となるものが強く意識されており、本書をひとつの起点として今後の『サンデー毎日』研究や週刊誌研究が行われることが期待されているのである。

本書の特徴はなんと言っても、これまで研

究の俎上に上がりにくかった「週刊誌」という媒体に注目した点にある。本文中でも繰り返し強調されているように、文学研究はこれまで代表的な同人誌や大手新聞といった特権化された対象の研究に注力することが多く、週刊誌はどこか猥雑なものの、周辺のものとして閑却されてきた。本書ではそうした反省から、文学研究・メディア研究などにおいて見落とされてきた、週刊誌にまつわる多様な論点が提出されている。

本書収録の論考はそれぞれ単体で見ても興味深いものだが、書籍という形で提示されていることの意義も大きいように思われる。さまざまな観点から『サンデー毎日』のあり方について眺めることで、より立体的に本媒体を理解することが可能だからである。たとえば第一部では、芥川龍之介や久米正雄、薄田泣菫といった固有名が繰り返し登場し、それぞれがどのような戦略のもと行動していたかが多角的に描かれるような構成となっている。本書が示しているように、単に作家の意図や作品の批評性に注目するだけでなく、編集者や媒体の要望、他作家の動向など多数のエージェントがどのように機能しているか、その機制を明らかにしていくことが今後の研究にも求められていくのではないだろうか。

（二〇二四年一〇月三〇日 文学通信 三八四頁 四二〇〇円＋税）



石原深予 著

『枯草のクッションを敷いた古馬車』 尾崎翠全集未収録作品ほか

山根 直子

尾崎翠には〈悲劇〉と〈孤高〉というイメージがつきまとう。文壇から距離を置いた天才。若くして精神を病み、帰郷を強いられて、断筆。以後家族の世話をして生き、老いて死にゆく間際、自分の人生のむづかさに涙した作家――『尾崎翠全集』（創樹社、一九七九年）の「解説」を契機に広がったこのような翠の作家像は、彼女の再評価を後押しする一方、史実と乖離した「神話」だと批判されてきた。翠の断筆は〈悲劇〉なのか、彼女は本当に〈孤高〉だったのか。その問いに、本書は真つ向から挑んでいる。本書は『定本尾崎翠全集』上下巻（筑摩書房、一九九八年）刊行後に発見された作品と、文庫未収録作品、翠が自らの「文芸感」^{マヤ}を表明した映画評「映画漫想」を一冊にまとめたものである。しかし単なる作品集ではない。収録作品の詳細な解題と従来の誤りを正して同時代評を補った年譜、そして翠の伝記を知る上で必読の日出山陽子氏の「尾崎翠の生涯」を付すことで、翠の実像を精緻に描き出す。長年、翠研究に尽力され

てきた石原深予氏が編者だからこそ成し得た、翠の作家研究の集大成でもある。

本書は全七章の構成。「Ⅰ 小説」では、帰郷後に書かれた「書簡集の一部分」に注目したい。本作は従来の〈小野町子もの〉の解釈を覆し、翠の断筆の理由をも再考させる重要作品だ。「Ⅱ エッセイ・評論・拾遺」と

「Ⅲ 映画漫想」では、翠の文学観や受容した作品の詳細を知ることができる。「解題」の網羅的な事項解説と合わせて、翠文学の形成過程を知るための最良の参考文献と言える。「Ⅳ 初期詩作」と「Ⅴ 初期歌作」

には、後期作品に通底する、明るく透明な詩感に触れることができる。翠が一貫して「詩」の人であったことに気づかされる。「Ⅵ メ

ッセージ」は、文壇人や、親族との間に交わされたユーモアと心遣いに満ちた書簡の中に、決して〈孤高〉ではなかった翠の様子が

窺える。なお、巻末の「年譜」に挙げられた膨大な同時代評も、翠の文壇内での位置づけを示す貴重な資料である。「Ⅶ 帰郷後随想」

では、翠自身が断筆を「黄金の沈黙」と考えていたことが示される。

本書の大きな意義は、尾崎翠を〈悲劇〉と〈孤高〉という「神話」のイメージから解放し、同時代の社会、文化、人々との関わりの中

で、その実像を捉え直す土台を提供する点にある。石原氏は翠の断筆を家庭の事情と時代状況の結果であると指摘する。翠の心身の

不調は「近代化の過程で掘り崩された女性性の問題」を、翠が「時代の課題としても引き受けて追及し、作品化を試みたがゆえの疲弊ではなかったか」という考察も興味深い。本書は女性作家とはどのように成立しようのかを考える視座をも提示している。

本書の刊行により、翠研究の土台が整い、より普遍的な課題が提示されたことで、今後、新たな研究者の参入も期待される。石原深予氏の長年にわたる甚大なる翠研究へのご貢献に、心より敬意と感謝を表したい。

（二〇二四年六月一日 幻戯書房 三八四頁 四八〇〇円＋税）



■二〇二五年度 関西支部秋季大会 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇二五年度秋季大会における自由研究発表、およびパネル発表を募集いたします。支部会員の皆さまの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

◆日時・会場 二〇二五年一月上旬予定

関西大学

※詳細は決定次第、関西支部公式ブログでお知らせいたします。

◆募集人数 自由発表 若干名

パネル発表 若干グループ

◆応募締切 七月五日（日）必着

◆応募要領 自由発表は、発表題目および六〇〇字程度の（応募段階における）結論まで明記した要旨をメール又は封書でお送りください。パネル発表は、発表題目と全登壇者の氏名と役割分担、および一〇〇〇字から一五〇〇字程度の趣旨文をメール又は封書でお送りください。科研費プロジェクトの成果報告等も受け付けております。発表者数は企画者に一任いたしますが、関西支部会員を一名以上入れてください。

発表時間について、自由発表は三〇分程度、パネル発表は二時間程度です。応募の際は、必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等も明記してください。発表に関して、ご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】

〒604-8456

京都市中京区西ノ京壺ノ内町8-1

花園大学日本文学科 高橋啓太研究室内

日本近代文学会関西支部事務局

もしくは、関西支部公式ブログに記載のメールアドレスまで。

■会議の記録

三月二十六日（火）

【第一回運営委員会】会報三十九号について、会報四〇号について、ウェブ関連機器の購入について、二〇二四年度予算案、その他の支部会計関連、二〇二三年度会計監査について、二〇二四年度春季大会について、二〇二三年度秋季大会について、二〇二三・二〇二四年度委員の自己紹介と二〇二三年度役割分担について。

〔関西大学梅田キャンパスおよびオンライン開催〕

五月四日（土）

【第二回運営委員会】運営委員会年間スケジュール、会員の異動について、会費二年分未納者への対応、未納についての会則の文言、二〇二四年度春季大会の運営について、二〇二四年度総会について、二〇二三年度会計報告・二〇二四年度予算案、その他会計関連、懇親会について、会報四〇号について、二〇二四年度秋季大会に向けて、ブログ・編集委員会での使用のサーバについて。

〔関西大学梅田キャンパスおよびオンライン開催〕

七月四日（日）

【第三回運営委員会】会員の異動、二〇二四年度秋季大会発表者の選出について、二〇二四年度春季大会会場校補助金と懇親会費、二〇二四年度予算案（修正）と支部支援金、会

費二年分未納者への注意喚起、支部長の再任・選出について、次期支部長の選出、二〇二四年度秋季大会の運営について。

〔オンライン開催〕

九月二一日（日）

【第四回運営委員会】会員の異動、会費納入確認作業、会報発送の住所、支部会員名簿の変更、海外在住者への会報等発送、四月に本部に提出する支部会員名簿と会費滞納者、二〇二四年度秋季大会役割分担、懇親会、大会発表者への連絡、次期支部長の選出、会報四一号、二〇二五年度春季大会企画特集・登壇者、今後の企画係のあり方について、次年度運営体制について、次回運営委員会について。

〔関西大学梅田キャンパスおよびオンライン開催〕

十一月一〇日（日）

【第五回運営委員会】会員の異動（入会者）、新運営委員、書評。

〔甲南女子大学およびオンライン開催〕

一月二六日（日）

【第六回運営委員会】会員の異動、二〇二五年度春季大会発表者の選出と発表順、二〇二五年度春季大会の実施方法と運営、二〇二四年度末に二年分未納で退会予定の会員への連絡、入会退会手続き等の簡略化（申込書・ブログの変更等）、運営委員各係の負担軽減策、二〇二五年度の運営体制（運営委員長／副委員長の選出）、運営委員係の組替案（再

編成）の可否や予定、支部会計関連、二〇二五年度秋季大会、会報四一号（發送同封物等）、会報四二号（献本）。

〔オンライン開催〕

三月二十七日（木）

【第七回運営委員会】会員の異動、会員数、重複入金の対応、入退会手続き（入会フォーム等）、運営委員各係の業務確認（負担軽減策と再編に関わって）、二〇二五年度の運営体制案、二〇二四年度申し合わせと引き継ぎ〔関西大学梅田キャンパスおよびオンライン開催〕

■機関誌『関西近代文学』投稿論文募集のお知らせ

電子版機関誌『関西近代文学』の投稿論文を募集いたします。

○第五号（二〇二五年九月発行）の締め切り
……二〇二五年五月五日

○第六号（二〇二六年三月発行）の締め切り
……二〇二五年十一月五日

送り先、書式（文字数）等については、公式ブログを御覧ください。



第四号は、二〇二五年三月二〇日に公式プロ

グにて公開されました。

○第四号・目次

霍思静「三島由紀夫「火宅」論——初期の劇作法と岸田國士受容——」

論文要旨

電子版『関西近代文学』投稿規定／査読方法及び審査基準
編集後記

■事務局だより

◆献本のお願ひ

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先：関西支部事務局

なお、書評欄への掲載の採否、時期、および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

◆会費納入について

二〇二三年度より関西支部では維持会費制を廃止し、会費制を導入しています。会費三千円（ただし前年度未納の方は六千円）を、同封の振替払込用紙などで納入してください。

い。能登半島地震被災に関わる減免措置を含め、詳しくは、同封の別紙「年会費納入のお願い」または関西支部公式ブログをご覧ください。よろしくお願い申し上げます。

◆登録情報変更について

ご住所やご所属が変更になった場合は、「登録情報変更手続」を関西支部公式ブログからダウンロードし、メールなどで関西支部事務局にお知らせください。

◆会報の内容変更について

次号の会報（第四二号）から、大会の「発表要旨」を紙面から削ることとなりました。関西支部公式ブログ掲載の「発表要旨」を御覧下さいますようお願いいたします。

◆二〇二五年度運営委員

支部長 関肇

運営委員長 高橋啓太

運営副委員長 武田悠希、武久真士

〔書記〕金岡直子、原卓史、*加藤大生、

*古閑裕規、*西川貴子

〔財務〕天野勝重、熊谷昭宏、信時哲郎、

花崎育代、*澤西祐典、*永井敦子

〔広報〕佐々木幸喜、永渕朋枝、松田樹、

*宮本和歌子

〔企画〕稲垣裕子、東口昌央、山根直子、

*峯村至津子

*は新規の委員

◆二〇二五年度『関西近代文学』編集委員

運営委員長 山本欣司

編集主担 白方佳果

編集委員

天野勝重、黒田大河、鈴木暁世、

*青木亮人、*笹尾佳代、*高木彬、

*田村美由紀

*は新規の委員

日本近代文学会関西支部事務局

〒604-8456

京都市中京区西ノ京壺ノ内町8-1

花園大学日本文学科 高橋啓太研究室内

日本近代文学会 関西支部

会報 四一号 二〇二五年五月一日

編集・発行人 関肇

日本近代文学会 関西支部

〒604-8456

京都市中京区西ノ京壺ノ内町8-1

花園大学日本文学科 高橋啓太研究室内

※斬新な発想と問題提起による源氏物語への誘い

源氏物語散策

文学史・歌舞伎・人物・谷崎源氏

田坂憲二 源氏物語の中に文学史を置き、宇治十帖は長い短編物語と断じ、先読み注釈の危険性を指摘。戦前の源氏研究の闇の部分の究明し、谷崎源氏と与謝野源氏の競演を辿る。桐壺巻冒頭を論じ、花散里・玉鬘像の再構築を行う。

新刊・定価2750円 税

※人形浄瑠璃はいつ、どのようにして「古典」になったのか。

人形浄瑠璃の「近代」が始まったところ

観客からのアプローチ

海老根剛 人形浄瑠璃はいつ、どのようにして「古典」になったのか。またそれはいかなる意味を持つ出来事だったのか。昭和初年の大阪に登場した新しい観客たちに注目し、人形浄瑠璃の「近代」への歩みを再考する観客史の試み。

新刊・定価2420円 税

※時間も空間もワープする？演劇の魔術が解き明かされる

演劇をめぐる八章

岩井眞實 歴史と理論を学び、創作の現場にも身を置いた著者が、古今東西の演劇を「時間」「自然」「戦争」「愛」「旅」「金」「笑い」という八つの切り口から論じる。若い人に読んでいただきたい。

新刊・定価2420円 税

※江戸中期から現代につづく伊勢松阪の知

本居宣長・本居春庭・小津久足・小津安二郎

伊勢松阪の知の系譜

柏木隆雄 江戸中期の松阪は木綿と、肥料の干鰯で富を誇る商人が輩出、その一党の本居宣長、その息春庭、春庭弟子の豪商小津久足及びその後裔小津安二郎ら松阪「小津党」四人の知的つながりを、繋がる線として辿る画期的評伝。

新刊・定価3960円 税

※「野生味」と「反骨精神」と

能火野人、佐藤春夫

「のうかやじん」は「くまのびと」の謂いなり

辻本雄一 「能火野人」とは春夫晩年の号だが、土地の歴史や文化に根差した「熊野人」を意識した号である。熊野の地で培った「反骨精神」の原点を辿り、(個)として自立し(文学世界)を確立してゆく過程を通史編や論考編で追った。

新刊・定価5500円 税

※南吉生誕百年記念出版

新美南吉の詩と童話

哀のある愛の世界

谷悦子 南吉の幼年童話と詩が、豊かな空想力・ユーモア・哲理性をもち、子どもの複雑な心と人はどう生きるべきかを描いた童話に新しさがあることを論じた。また、安城高等女学校での教師としての南吉を明らかにした。

定価3300円 税

※今どきの日本語、気になりませんか？

葎の髓からのぞく日本語

工藤力男 プロ野球の球団名の愛称が、横浜は「ベイスターズ」なのに、阪神はなぜ「タイガース」なのかなど、とすると見過ごされがちな、日本語の諸現象に焦点を絞って考える十二の考察と三つの発言を収めたエッセイ集。

定価1430円 税

※推薦「温泉俳人なぐんて呼ばれたいなあ」坪内稔典 俳人

温泉文学事典

浦西和彦編著 わが国の近代文学者たちと温泉地との結びつきは深いものがある。本事典は温泉を基軸とした世界でも例のない最初の文学事典である。文学研究者だけでなく、文化史研究者や温泉愛好者たちなどに広く読まれることを願っている。

定価6600円 税

大阪近代文学事典

日本近代文学会関西支部大阪近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ16 定価5500円 税

滋賀近代文学事典

日本近代文学会関西支部滋賀近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ23 定価8800円 税

兵庫近代文学事典

日本近代文学会関西支部兵庫近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ26 定価5500円 税

京都近代文学事典

日本近代文学会関西支部京都近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ29 定価6380円 税

日本近代文学会関西支部編

鉄道 関西近代のマトリクス

和泉ブックレット1 定価990円 税

近代文学のなかの「関西弁」

語る関西／語られる関西

和泉ブックレット3 定価1210円 税

文学研究における継承と断絶

関西支部草創期から見返す

和泉ブックレット5 定価1100円 税

海を越えた文学 日韓を軸として

和泉ブックレット7 定価1100円 税

村上春樹と小説の現在

定価2640円 税

作家／作者とは何か

テキスト・教室・サブカルチャー

定価3960円 税